文献紹介

小林浩二：『統合ドイツの光と影』

二宮書店，1993年11月30日発行，
210ページ，1,800円

統合ドイツといえば，失業者の増加，ネオナチズムの台頭と外国人排斥という報道が記憶に新しい。本書はそのような現状を，フィールドワークを基に，旧東ドイツの旧西ドイツ化に焦点をあてながら編まれたものである。構成は生活・余暇，都市・交通，産業・経済，自然，政治・地域計画という各章，およびそれらから導きだされる統合ドイツの課題からなる。本書によって，読者は統合ドイツの現状とともに，地理学者がどのように地域をみ，考えるのかを知ることができよう。以下，この点に注目しつつ，内容を紹介したい。

生活・余暇で，著者は旧東西ドイツの比較というマスコミの姿勢を批判しながら，旧東ドイツの生活の質がわが国を上回っていることを認めている。年間18日間のウアラウプ，つまり文字通りの有給休暇があったら，読者はどう過ごされるであろうか。このように，地域の特色を考えるとき，まず郷土（この場合，日本）と比較することが有効な方法であるといえよう。

旧西ドイツでは都市と近郊が郊外電車・地下鉄・バスによって有機的に結びつけられている。これに対し，旧東ドイツでは交通体系の整備が遅れ，都市域が狭く，都心近くに高層住宅が立地する。これは景観・土地利用に，国家管理という旧東ドイツの特色が示されたものである。景観と土地利用をみる目を養えば，どこでも地域の特色をつかまえることができる一例といえよう。

著者は旧東ドイツの「南高北低」という産業構造の格差を統合によって解消しながらも，地域性を残すべきだと主張する。失業者の増大とネオナチズムの台頭のなかで，短絡的に画一的な経済発展を求めるのでなく，地域に根ざした（つまり，地域性を活かした）経済発展を考えなければならない。このような主張はまさしく地理的な見方・考え方といえよう。そのため，著者は旧東ドイツの交通体系の整備や農業構造の再編でも，単に旧西ドイツ化させるのではなく，旧東ドイツの特性を活かすべきだという。

統合ドイツは旧東ドイツの旧西ドイツ化という大きな流れのなかにあって，旧東ドイツでの環境汚染，統合に伴う経済悪化と増税，ネオナチズムの台頭などのさまざまな問題を抱えている。著者は統合に伴う旧西ドイツ人の不満をいかにやわらげ，旧東ドイツの行政組織を効率よく機能させながら，旧東西ドイツの経済格差を解消するかが，その未来を決定する鍵だという。本書は読者にドイツ統合のなかで揺れる人々の姿とともに，その力強い意志を知らせ，10年後の新たなドイツの姿をイメージさせるものとなっている。従来の自然から人文へという地誌と異なり，現在のドイツの地域的特色をそれぞれの要素と結びつけながら読者に平易に伝える良書といえよう。その意味で，図16（193ページ）に都市名・地名を加えたインデックスマップが本書の最初にあればより読者に理解しやすかったと思われる。また，56ページの旧西ドイツの自動車普及率は1998年ではなく，1989年の誤植だろうし，79ページの図6のMbで示される地方食糧品局は図中にみられなかった。

本書は著者の『変貌する西ドイツの都市と農村』（大明堂，1990），『都市と農業の共存』（大明堂，1992），『激動の統合ドイツ』（古今書院，1992）を基礎としている。これらを読めば，著者のめざす地誌がどのようなものかおわかり頂けると思う。併読をお薦めしたい。　（伊藤貴啓）